乙　　第　　号

石川 智朗　学位請求論文

# 審　査　要　旨

奈　良　県　立　医　科　大　学

# 論 文 審 査 の 要 旨 及 び 担 当 者

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 委員長 | 教授 | 鶴屋　和彦 |
| 論文審査担当者 | 委員 | 病院教授 | 西久保　敏也 |
| | 委員（指導教員） | 教授 | 野上　恵嗣 |

主論文

Comprehensive coagulation and fibrinolytic potential in the acute phase of pediatric patients with idiopathic nephrotic syndrome evaluated by whole blood-based rotational thromboelastometry

ROTEM を用いた小児特発性ネフローゼ症候群患者の急性期における包括的全血凝固線溶能

Tomoaki Ishikawa, Yuto Nakajima, Takashi Omae, Kenichi Ogiwara, Keiji Nogami

Pediatric Nephrology 2022. Jan 8; 1-10.

doi: 10.1007/s00467-021-05366-4. Online ahead of print.

# 論文審査の要旨

申請者は、特発性ネフローゼ症候群（INS）の患者を対象に、初発時、1 週後、2 週後、3 週後、4 週後、再発時の状態についてローテーショントロンボエラストメトリー（ROTEM）を用いて測定し、健常対照群と比較した研究で、凝固系は発症 2 週後まで亢進し、3 週後には回復していたこと、線溶系は発症から 4 週後まで亢進していたこと、MCF、アルファ角はアルブミンと、LI60 は IgG やフィブリノーゲンと有意に相関していたことを報告した。INS における凝固線溶系についてはエビデンスが少なく病態が明らかにされていないため、INS 発症後の凝固線溶系について経時的に検討した本研究は極めて新規性が高く、意義のある研究である。

公聴会の発表は要点が要領よくまとめられており、非常にわかりやすかった。質疑応答では、初発群と再発群で結果に差があったのはなぜか、低アルブミン血症と凝固能亢進の機序をどう考えるか、重回帰でも関係性は残ったか、凝固亢進におけるアンチトロンビンなどの抗凝固因子低下の関与はどうであったか、などの質問に対し、適切かつ明確に返答された。今後の臨床において非常に有益な研究で、公聴会の発表、質疑応答も併せて、学位論文に十分に値すると思われた。

# 参　考　論　文

1. Coagulation Potentials in Pediatric Patients with Immunoglobulin A Nephropathy

   Omae T, Ishikawa T, Nakajima Y, Nogami K. Pediatr Int. 2021 Oct 26. doi: 10.1111/ped.15042.

2. Maintenance therapy with mycophenolate mofetil after rituximab in pediatric patients with steroid-dependent nephrotic syndrome

   Ito S, Kamei K, Ogura M, Sato M, Fujimaru T, Ishikawa T, Udagawa T, Iijima K. Pediatr Nephrol. 2011 Oct;26(10):1823-8.

以上、主論文に報告された研究成績は、参考論文とともに発達・成育医学の進歩に寄与するところが大きいと認める。

令和４年３月８日

学位審査委員長

腎臓病態制御医学

教授　　鶴屋　和彦

学位審査委員

発生・発達医学

病院教授　　西久保　敏也

学位審査委員（指導教員）

発達・成育医学

教授　　野上　恵嗣